
Check Mate

koon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C h e c k M a t e

【Nコード】

N 1 5 4 6 Q

【作者名】

k o o n

【あらすじ】

将来の夢を追い上京したが、なかなか上手く行かない現実に挫折そうになっていたフリーターの村田恵、21歳。そこに現れた「天使」と名乗る男に突然自分の未来を知らされて…。

Prologue

『めぐみん元気？(^ - ^) -
今日めっちゃ寒くない！？
てか突然だけど今夜代わりに
バイト出といてくれないかな』

明菜
『

『元気だよ(^ - ^)
寒いねー風邪ひかないように。
分かったどうぞ暇だったし！

恵
『

『いつもいつも悪いね(^皿^)
今夜はダーリンに温めてもらうから
大丈夫(笑)
ありがとうね』

明菜
『

「…………ふ。」
キンキンに冷えた空気に支配された一人暮らしの部屋の中、

いつもこうして面倒ごとを私に押し付けてくる明菜からのメールを見て、
悪態をつくよりも先に失笑が漏れた。

Chapter 1 " First Contact "

「失礼しまーす」

私のバイト先でもあり、明菜と知り合った場所でもある居酒屋「のん兵衛」のスタッフ専用入り口を開けた。そこには見慣れた風景の並べられたロッカーと散乱した椅子。

そのうちの一つに座っていた男がパアツという効果音が聞こえてくるような勢いでこちらを振り返る。

「あつき・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

心の中で舌打ちをする私だったが、わざと驚いたような照れくさい顔をつくる。

男は少し目を丸くしたが、すぐに状況を理解した様だった。

「わりいわりい。今日も明菜ちゃんはズル休み？」

「最近来てたのにな。」

少し恥ずかしそうにぽりぽりと頭を掻きながら男は少し浮いていた腰を下ろした。

努めてクールに振舞おうとしているのが窺えて私は思わず噴出しそうになってしまう。

「早く着替えるよ。今日店長あんま機嫌良くねえから。」

この男は後藤信二^{ごとうしんじ}、確か26歳。
一見硬派でさわやかな好青年なのだが、
明菜のようなギャルにめっぽう弱い情けない男だ。
今ではショート黒髪とさわやかヘアスタイルだが、
一時期明菜の彼氏を真似してブリーチをしようとしたが美容院に行
くお金が無く、自ら挑戦したところ悲惨になっていたこともあった。

「・・・返事は？」

棘のある後藤の言葉にはっとして私は焦る。
ついぼーっとしてしまいいつもの【従順恵ちゃん^{じゆんけいちゃん}】を忘れてしまっ
ていた。

「は、はい！今すぐに！」

店のロゴの入った制服のTシャツと黒のズボンにさっさと着替えて、
私は時計を見上げた。

間もなく明菜のシフトが始まる18時になるところだ。

後藤は自分のシフトが終わったところだったらしく、
明菜が来るのを待っていたところ私が来たためそそくさと帰ってし
まった。

何回か鏡に向かって作り笑顔を練習し終えて、

私は店内に繋がっている扉を開けた。

途端に小さく聞こえていた客のざわめきや音楽等がどっと流れ込んでくる。

「あ、村田さん？」

ちょうど通りかかった店長が声をかけてきた。

後藤が言っていた様にもあまり機嫌は良くなさそうだ。

「あ、はい！えとー…」

「今人手足りないからテキパキ動いて！」

あ、4番テーブル呼んでたから行ってあげて、早く！」

そついでに残して店長は小走りに厨房の方へと消えていった。

あまりの忙しさにシフトの違いなどに気づいていないのだろう。

一人寂しく部屋にいるよりもバイトをしている方が好きなので、私は気合を入れて4番テーブルに向かった。

「お待たせいたしましたー！ご注文の方お伺いします！」

いつもの作り笑顔を浮かべながら、お決まりの台詞を述べた。

4番テーブルには、居酒屋に似つかわしくない、ビシッとスーツで決めた中年男性と厚手のコートを着て少し緑の色が入った眼鏡をかけた私と同じ年くらいの男が座っていた。

私が来たことによつて話を中断して2人ともこちらに顔を向けた。

「あー、大生ね」

店員が来るのを結構待っていたのだろう、スーツの男は少し不機嫌そうに注文してきた。

それでも私は笑顔で注文を繰り返しメモを取った。

書き終えて顔を上げ、もう1人の男を見る。

すると男は注文を口にせず、じつと目を見つめてきた。

眼鏡の奥に光る瞳は少年の様に無邪気で全く汚れていなかった。

久し振りにこんなに澄んだ目を見る……

眼鏡のせいからか、緑にきらめく瞳に私は吸い込まれてしまいそうだった。

やわらかくウェーブのかかった明るい髪の毛、まるで綿菓子のように

うに揺れている。

「すけ・・・ケイスケ！」

スーツの男の声にはっと我に帰ると、慌てて

「ご注文の方よろしいでしょうか？」

と、ケイスケと呼ばれた男に問いかけた。

「ああ…すみません。じゃあ、ウーロン茶…」

少しだけ低い、これまた無邪気な声でケイスケがゆっくりと述べた。

(ああ、まるで…)

私はまたもこの男の世界に吸い込まれそうになり慌てて現実に自分を引き戻した。

「かしこまりましたい！」

思わず噛み倒してしまい、すみませんと頭を下げた。

するとふつと頭に息がかかった気がして、頭を上げるとケイスケのくしゃつとした笑顔が自分に向けられていた。

「そ、それではすぐにお持ちしま・・・す!」

走り出すのを堪えて足早にその場を去った。顔が熱かった。

その後はあまり4番テーブルには近づかないようにしていた。

とはいっても、

2人はそれぞれの飲み物をなにやら真面目な話をしながら飲み干すと、

何も注文せず30分ほど話し続けた後帰ってしまったので、追加注文に呼び止められることも無かった。

店からしてみれば忙しいときに飲み物2杯だけで居座り続ける客は迷惑極まりないのだが、私はまた来て欲しいと思ってしまった。

あんなにもかもを忘れさせてくれるような笑顔にもう一度会いたい・・・。

「お疲れさまでーす」

誰からも返事が来ないまま、私は例のむさ苦しいスタッフ専用控え室から脱出した。

時刻は23時過ぎ。明菜の5時間のシフトをみっちりと閉店までこなしただのである。

「うああ・・・寒いー！はーっ」

吐く息が真っ白でつい何度も深呼吸してしまう。

(にしてもあの男の子・・・素敵な人だったなあ。)

あれからずっと頭から離れないあのどことなく懐かしいにおいのする男の子。

なんだろう？

お母さんのおい、

実家のおい、

学校のおい、

そうじゃなくて、もっと懐かしい・・・

(!?)

突然ほわんと首周りが暖かくなった。

とても軽くて柔らかく、そこにあるのに気づかないくらい気持ちいいストール。

雲のように真っ白でふわふわなストールがいつの間にか私にかけられていた。

「んー…気をつけないと、風邪ひいちゃうよ…」

反射的に振り向くと、そこには眠そうに立っているあの男の子がいた。

相変わらず厚手のコートと眼鏡をかけている。

「あ…ありがとう。」

どうやらこのストールは彼が掛けてくれたものらしかった。けれども、彼は私から5メートルくらい離れている…。

「お店終わるまでずっと待ってたんだよー。ちよつと寝ちゃった。」

屈託のない笑顔で私に笑いかけてくる。

なんだかまた顔が熱くなっけきそうな気がして思わずうつむいた。

（なんでこの人私のこと待ってたんだろっ…）

聞きたくても恥ずかしくて顔が見れなくて、黙ってることしか出来ない。

「庄田しやうださんとちよつと喧嘩しちゃったよー。」

俺がどうしてもここに残りたいて言ったら怒っちゃってさー。
あーでも……」

庄田さんとは多分先ほどの中年のスーツを着ていた男だろう。
一体どういふ関係なのだろう。この男は本当に謎が多い。

じっと自分の足を見つめていると、突然ふわっとあの懐かしいにお
いがした。

気づくと目の前にはケイスケらしき足。

(え……)

思わず顔を上げると、かなりの至近距離にケイスケの顔があった。

「うん……良かった。」

「やっと見つけたよ。」

驚きとわけのわからなさで恥ずかしさで私の心臓は一瞬止まりかけ
た…。

Chapter 2 " Angel " ;

カン…カン…カン…

古くてぼろいアパートの階段をいつもより余計ゆっくり上っていた。

(何?何なの?え?)

幾度も1時間前の会話を頭の中で繰り返してはごうして自問自答を繰り返していた。

—————遡ること12月2日夜23時14分—————

「村田恵ちゃんってさー、クリスマス予定、ないでしょ。」

本日初対面なはずの男にフルネームで呼ばれ私は目をぱちくりさせた。

しかも予定ないでしょって…嫌味?

私の吐く白い息が、夜空へと昇っていく。

不思議とケイスケの息は白くなっていないようだ。

まるでこのキンキンの空気よりもケイスケの吐く息の方が冷たいかのようだよ。

一瞬、木々がざわめく。

私の返事も待たずケイスケはゆっくりと続けた。

「そう、クリスマスイブ。

予定がなくて恵ちゃんはずっと部屋でテレビを見てる。
だけどそこに男の先輩から突然のメール。

滅多に來ないのになんで・・・？って思っただ。

メールの内容は近所の公園への呼び出し。
時刻は夜22時。おかしいと思っよね？

だけど恵ちゃんは行ってしまっんだ…。」

ズキン。

なぜか頭に激痛が走った。

「なんのこと…?」

頭痛に目を細めながらも私は聞いた。

(未来のことを話しているの？22日後の私?)

ケイスケは少し微笑み、天を仰いだ。

釣られて夜空に目を向けると、きらめく星たちがそこにあった。

「…そこには5人の知らない男。」

上を向いたままケイスケが続けた。

「恵ちゃんは茂みに押し倒される…」。

なんで？なんで？

叫ぼうとするけど何度も殴られて…」

私は固まった。

この男は何を言ってるのだ？

何を根拠に私が犯されるなど…。。

「叫び泣き疲れ放心状態の恵ちゃんを笑う声。

見上げると、そこには見覚えのある顔…。。」

なんだろう、泣きそうだ。

こんなのこの男の作り話に決まっているのに、
けれども聞かずにはいられなかった。

ゆっくりとケイスケの顔を見つめ、口を開く。

「…誰なの…？」

「たかはしあきな
高橋明菜」

ケイスケが夜空から私に視線を戻してゆっくりとそう呟いた。

確かにそう言った。

私のバイト仲間でもメール友達でもある、明菜の名前を。

「だけど…だけど…私は男の先輩に呼び出されたんでしょっ?!」

やっぱり、こんなの作り話・・・」

心臓が胸を中から叩きつけていた。

ドクンドクンドクンドクン（嘘だよ!だまされないで、恵!）

「彼女は後藤信二を利用したんだ。

あの男は、高橋明菜に振り向いてもらえるのなら、なんでもする。

「一気に地獄に突き落とされた気分だった。

ありえる。ありえる話。

「嘘だ・・・！なんであんなにそんなの分かるのよ！」

3粒ほど頬を涙が流れ落ちた。

「あーっと、

ごめん、自己紹介忘れてました。」

ケイスケはそう言うと一歩下がって綺麗にお辞儀をした。
またあの懐かしいにおいが漂ってくる。

「人間名、ほうじょうけいすけ北条慶介。

トリプルE+AAAID6782、クリス。

「以後お見知りおきを。」

「とりぷるえーID・・・？人間名って・・・？」

にここにことしている慶介の顔を思わずにらむ。
質問の答えになっていないじゃないか。

「AAAは、格の示しってどうかー。」

まあトリプルは一応エリートに入るんだけどねー。」

わけがわからない。

しかし、わかりたくもなくなってきた。

「まあ、簡単に言うと、本名はクリス。

人間みたいに苗字はないんだ。IDが判別に使われるしねー。」

（はあ…。）

なんだか1人で話し始めた慶介（もといクリス？）を見ていると、
段々これは夢の中なのではないかなんて思えてくる。

「あの。質問の答えを……。」

慶介が一層笑顔を大きくする。

「ああ、一応答えのつもりだったんだけど。ごめんごめん。

なんでそんなことがわかるかってことだったよね。

僕、というよりは、僕たちには未来が分かるんだ。」

僕たち……。
いや他に誰がいるんだという突っ込みも言えぬまま、
先ほどのこの男の話からのショックも癒えてきていた。

「あーうん。」

だからね、僕は天の使いクリス。

エンジェルと呼ばれてます。」

その瞬間慶介の背中にバサツと翼が生えた。…気がした。

「ああうんエンジェルね……天使……Angel……」

全身から力が抜けるのがわかった。
へなへなと近くのベンチに座り込み、こいつの話を真剣に聞いていた自分が恥ずかしくなってきた。

「いや、あの、嘘じゃないんだってば」

焦って駆け寄ってきた自称クリスは私の横に腰掛けた。

「んー。34、33秒後に酔っ払いのおじさんが僕たちの目の前でこける。」

そう言っつてクリスはパチンと指を鳴らした。

32、31、30…

無邪気な声でカウントダウンを勝手にし始める。

馬鹿馬鹿しい、と私は携帯に目をやった。

もう23時半を過ぎていた。早くしないと終電を逃してしまう。

20、とクリスが唱えた頃に、路地の向こうから大きな鼻歌が聞こえてきた。

少しずつ近づいてくる。

14秒・・・ふらふらと千鳥足でよれよれのスーツを着た還暦目前くらいの親父が角を曲がって私たちの前に現れた。

(・・・そんなばかなー)

内心冷や汗をかきつつその親父を目で追う。

あよいよいなんて叫びながら私たちの前を通り過ぎようとした瞬間、

クリスがゼロ、と小声で呟くのが聞こえた。

「うーっく・・・」

突然親父が小石につまずき派手に転んだ。

持っていたコンビニ袋の中身をぶちまけ、柿の種やら缶ビールなどが地べたに散乱した。

「おおおつやっちまったぜ！ひゃひゃひゃひゃ」

一人で笑い転げる親父と、荷物を笑顔で拾ってやっているクリスを見比べ、私は顔から血の気が引くのをはつきりと感じた。

「天使・・・なんて・・・」

ガチャリ。

私は真つ暗な部屋の中に倒れこむようにして入った。
外と大差ない寒さが部屋の中に渦巻いている。

振り返り急いで扉を閉めると、途端に静寂が襲ってきた。

「はあ…はあ…」

体がガクガクと小刻みに震えているのがよく分かる。

この雪が今にも降りそうな気温も手伝っているのは確かだが、一番の原因はクリスマスだ。

慶介…いや、もうクリスマスでいいだろう。

例えこれが全て冗談だったとしても怒る気にはなれない気がする。

なぜなら、クリスマスがあの後語った、私のクリスマスまでの「未来の日常」があまりにも容易く想像が出来たから。

毎日明菜の後始末に追われ、深夜に帰宅しては1人寂しくコンビニ弁当。

あまりにも毎日が同じせいで、クリスマスでさえも途中で省略してしまっただけだ。

そして私は愕然とした。

その未来は確かに驚くことでもない、当たり前のもだった。
しかし改めて他人の口から言い聞かされることによって、私は初めて現状に気が付いたのである。

(私は…いつだって夢を追いかけていたはずなのに…いつのまにこんな…)

相変わらず震えている肩を強く擦った。

(……違う。本当に大事なのはそこじゃなくて…)

「恵ちゃんは、高橋明菜に裏切られたショックと恐怖とわけの分からなさで数日間引きこもってしまう。」

声から少し無邪気さも消えて、

緑の眼鏡の後ろから私を悲しそうに見つめるクリス。

少し頭を動かすたびに彼の柔らかい髪が揺れた。

「誰かに言える勇気もなく、1人孤独に震えて…」

でも31日になると、思い出したようにふらっと出かけるんだ。

その頃にはもう顔には生気が無くなってしまっている。

そして・・・」

そして・・・

私は何時間も夜の街を彷徨い続ける。

時折明菜や後藤に似た者に怯え狂いながら、

行き着いた場所は

「20階建てのビルの屋上・・・」

日本中が一齐に新年に向けカウントダウンをしている最中、

私は塀の上に乗る。

そしてカウントダウンが終わった瞬間に、

……ぐしゃり。

「恵ちゃんは1月1日の0時00分、自ら身を投げて、死ぬ。」

Chapter 3 " Black Pawn "

「明菜ちゃん！明菜ちゃん！」

風に舞うくると巻かれた金色の彼女の髪を必死に追いかけて、バイト先「のん兵衛」のスタッフ専用出入り口から勢いよく飛び出した。

「待って、待ってってば！」

…あ、こ、こないだ欲しいって言ってたネックレス。

これ、シャルルの、ほら！」

慌ててポケットの中を探り定価何十万もするそれを突き出した。もつとも、これは後輩やすれ違いの輩から”頂戴した”お金で得た物だが。

その瞬間、愛しの彼女は立ち止まり、あの可愛い純朴な笑顔で振り返り俺の顔を見つめてきた。

「先輩…いいんですかあ？」

ああ、なんてピュア！そしてなんて謙虚なんだ！
今までの俺が付き合ってきた女は皆俺の手からむしり取っては去っていったのに！

「もちろんだよ！他にも何かあったらなんでも言って！」

明菜ちゃんは全然気にしなくていいから！」

彼女の手を取って品物をその中に納めると、彼女はにっこりと微笑みかけてくれた。心の中で思わずガツポーズしちゃう俺。

「先輩いつもありがとー」

愛らしい声で上目遣いに俺を見つめて言う明菜ちゃんは、いつだって最高に可愛い。

胸下まで伸びる彼女の髪と、谷間の見えるVネックのシャツにちょっと心配になる丈の超ミニスカートに目を奪われ、またいつもの衝動に駆られる。

「ね、ね、この後暇？ちょっとさ…」

「ごめんなさあ〜い、あたしちょっと今から合コンなんですう」

ペコリと頭を下げ、ちよろっと舌を出して彼女は走り去っていった。

「合コンなんて…また無理やり誘われて…かわいそうに、可愛いもんなあ…」

ぼつんと一人寂しく取り残された俺は少しだけ満足そうに空を見上げた。

俺は最高に女運が悪い。

今まで付き合ってきた女たちは全員まぬけで軽くてどうしようもない奴らばかりだった。

俺が貢いでも貢いでも薄気味悪い笑顔でしか答えてくれなかった。

でも明菜ちゃんは違う。

俺が腐って目に付いた奴ら全員ぶん殴ってたような時期に、彼女は現れたのだ。

「あー」

道端に唾を吐いたとき、後ろから細く華奢な声が聞こえてきた。

ここ数ヶ月まともに向こうから話しかけてきた相手なんかいなかったっていうのに。

睨み付けるようにして後ろを振り向くと、俺は一瞬心臓が止まったかと思っただ。

根元から毛先まで綺麗に金色に染められたくるくるの巻き髪が風にそよいでいて、切りそろえられた前髪の下から大きく丸い潤んだ瞳が俺を見つめていた。

そして細い唇は綺麗なカーブを描いて微笑んでいる。

「これ、落としましたよお」

彼女が差し出した手の中には、先ほど後輩から憂さ晴らしのために奪い取った財布と宝石類があった。

特に興味も無かったので無くなっても困らない物だったのだが…。

久し振りに人に、しかもこんな自分好みの女の子に微笑みかけられた事への感動と驚きに俺はしばらく何も言えずただ彼女の顔を見つめていた。

「これ…あのブランドの限定品ですよね？」

俺が反応しなかったからか、彼女は持っていた財布を眺めて少し興奮した様子で話しかけてきた。

「これ、狙ってたんですよね！すごい高かったでしょ？」

男物だけど私本当に欲しくて…うらやましいなあ…お金持ちなんですわね」

白い小粒の歯を輝かせて彼女は俺を上目遣いで見てくる。

乾ききっていた自分の心が、潤いを求めていることに初めて気づいた。

そして、口が勝手に動き出す。

「あげるよ、それ！」

それが彼女、高橋明菜との出会いだった。

働く事なんか考えられなかったのに、彼女を追いかけて同じ場所でバイトも始め、ここまで出来る自分に少し自信を取り戻していた。明菜ちゃんは今までの女と違い、デートもしてくれたいしプレゼントのお礼に彼女自身をくれた。俺の猟奇的な心は薄らいでいったけれど、カツアゲ等は頻繁に行っている。彼女にいつだって喜んでいてほしいから…。

とはいえ、俺たちは恋人同士ではない。

明菜ちゃんは本当に可哀想な子で、先輩に脅されて仕方なく付き合いつつる相手がいるということなのだ。

そんなの俺がぶっ飛ばしてやるよ、と何度も言ったけれど明菜ちゃんはその相手の連絡先や名前を俺に全く明かすことがない。

(俺だけの明菜ちゃんに居て欲しいのに……)

そんな想いが募っていった……

そしてクリスマスも近づいたある日、彼女のために、俺のために、バイト先【のん兵衛】から帰る彼女の後を尾けることにしたのだった。俺の明菜ちゃんを苦しませている奴に会うために……

「おう信二！」

初めての尾行に冷や汗をかきながら人混みを掻き分けていると、唐突に後ろから肩を叩かれ俺はびくと飛び上がる。

焦って振り返ると、そこには高校時代の悪友、杉田亮すぎたりのうがにやにやしなから立っていた。

「久し振りじゃねえか！何してんの？」

数少ない俺が心を許せる仲間、杉田との突然の再会に少し戸惑いながらも、一目で相手が誰か思い出せる自分に驚いた。

「お前こそ何してんの。つか連絡寄越せよなー！」

「お前こそ携帯変えまくってんじゃないよ。どうせ悪さばっかしてんだろ。」

笑いながら肩を押し合い男同士の友情を確かめ合つと、俺はようやく本来の目的を思い出し後ろを振り返つた。

「やべ、こんなことしてる場合じゃねーって」

人混みに紛れて、明菜ちゃんの姿はもう見えなくなつてしまつていた。

ざわざわと行き交う女子高生やサラリーマン達は、見るからにガラの悪そうな俺と杉田を避けて通つていく。

「おいおいどうしたん？もしかして忙しかった？」

さほど気にした様子もなく杉田は後藤の視線の先を見ながら笑つた。杉田の肩まで伸ばした明るい茶髪と耳に光る大量のピアスがいかにも遊んでいる印象を与えてくる。

「あっち行くつもりだったの？お前も寂しいのな。」

「は？」

明菜ちゃんの追跡に早くも失敗した苛立ちから思わず杉田を睨むが、杉田は全く気づいていない様子で向こうの方に指を指した。

「向こうはほとんどあれだろ、ちょっと裏路地入ったら違法な接客店ばっか並んでるとこ。」

「馬鹿じゃねーの。あそこらへんにはカラオケだかゲーセンとかあるだろが。」

「どうせそこらでデートだべ。」

「デート？」

（・・・おっと、女を尾行してるなんて知られたら馬鹿にされるだけだ。）

俺は焦って「なんでもない」と無愛想に返事をする。

「まあ俺もどうせ暇だったしよ、飲みにでも行かねー？」

この人の多さでは今から探しても到底明菜ちゃん1人を見つけるなんて無理だな、と悟り俺は久し振りに腹割って話せる仲間との食事に賛成した。

「お前も相変わらず酒弱えーなおい！」

「うるせー、俺より足フラフラなくせしてよお」

「やんのかコラ腕鈍ったなんていわせねえからよ」

ばかみたいに大きい声を張り上げながら俺たちは近場の居酒屋から出てきた。通行人たちが横目でこちらを見ながら歩きを早めて去っていく。

とはいえこれは俺らなりの絆の深め合いだ。頭の悪い連中が声を張り上げてその場を支配した気分になっているだけの遊び。

「おっと、俺終電急がねえーと。」

お前家この辺だっつってたよな？

「そんじゃ俺行くからさつき渡したメアドに暇なときメールくれよ」

しばしのふざけ合いの後亮が携帯を開き、そういい残すと慌てて小走りで行って行ってしまった。

「相変わらず忙しい奴だなー」

ジャラジャラ音を鳴らしながら走っていく亮の後姿を目で追いながら呟くと、俺もそろそろ家路に着こう、と方向転換をして歩き出した。

表通りはジロジロ偉そうな大人たちが汚い「正義」を掲げて睨んでくるから嫌いだ。

だから俺はいつも人気の少ない、あまり他人に関心を持たない大人たちくらいしか通らない裏路地を好んで通る。

右に左に女たちの顔写真が大きく張り出された店たちの間を歩いていると、ふと前方に見覚えのある人影が一つの店から飛び出してくるのが見えた。

一緒に出てきた中年男性がその子の細い腕を掴み、半ば強引に細い道へと消えて行くのを俺はなんとなく目で追っていた。

（まさかな・・・。）

再び歩き出した俺は、なんとなくその2人の人影が出てきた店を見上げてみた。

幾つも並んだいかにも偽名の「愛仔」「やら」「寿理」などの名前や同じような顔ばかりの女たちの顔写真。

（くだらねえ。）

素行が悪くともこういう店には全く興味がなかった。最もこんなものに金を使ってるひまもなかった。

第一こんなことをしている女なんかみんな下衆だ、と小さく吐き出す。

猛烈に気分が悪い。

ピンクの看板、「cherry」という名の店から視線を外そうと思った瞬間、俺の脳に激しい電気ショックのような物が走った。

二度見、いや三度見くらいしてようやくそこに視線が落ち着く。

【有栖川 蘭】と書かれた写真には、
紛れもないあの子の顔が映っていた。

「明菜ちゃん……?」

くるくるした金髪の巻き髪。綺麗に切りそろえられたパツツン前髪。その下に光る大きくつぶらな瞳。
耳に開けられた何個ものピアスの数も一致した。

思わず振り返り明菜ちゃんの名前を大声で呼んでみたが、先ほどの店から出てきた2人の姿はもうどこにもなかった。

行き交う人々の中、背中を丸めてゆつくりと進んで行く。時折見知らぬ人と肩がぶつかりよるよると蛇行する。後ろを歩く人が舌打ちをしながら俺を避けて歩いていく。

- - リストラ - -。

無駄に甘やかしすぎな親に嫌気が指していた中学時代。

母親の異常とも呼べる愛情に吐き気がしていた。

容姿でいじめられるようになった高校時代。

友達と呼べる人も彼女も1人も出来ずに過ごした3年間。

大学に行く気力も出ず一般企業に就職した18の春。

一生懸命尽くしてきた。仕事一筋でいつだって生きてきた。

なのに就職して8年、右肩下がりの経済の中真っ先に切り捨てられた。

細い路地裏に滑り込むととうとう崩れ落ちてしまった。

今朝、いつも通り出勤したらこのザマだ。

どうすればいい。帰宅してもあのうるさいババアだけ…。

親父が死んでしまっってから2年、以来俺への関心が一層高まってしまった。

なんとか説得して18のとき一人暮らしを始める事が出来たのに、

1人は寂しいからと2年前から二人で暮らすようになってしまったのだ。

逆戻り…、いや悪化している。

俺に嫁が来ないのはあいつのせいだ！

(駿^{しゅん}ちゃん…)

一瞬真つ赤な口紅を塗りたくった唇で囁くあの顔が目の前に現れた気がした。擦れた、癖のある声。大嫌いな声。

どうしようか、仕事というあの女からの逃げ道がとうとう無くなっ
てしまった。

色々な絶望感に苛まれ、俺は人生という夢の無い世界を憎むように
うな垂れた。

「これ…。」

突然俯いていた俺の目の前に、淡いピンクで無地のハンカチが差し
出された。微かに花の香りが漂う。

ハンカチを差し出している指、手、腕の先を目で追っていくとそこ
には暗い茶髪の髪に包まれた小顔の女性が腰を屈めて立っていた。
俺の顔を少し警戒しながらも心配そうに覗き込んでいたが、目が合
うと焦って視線を逸らした。

キュツと結んだ薄い唇と、若干潤んでいる大きすぎないが綺麗な瞳
に目を奪われる。ナチュラルメイクなのかノーメイクなのか分から

ないくらい、”イマドキ”の顔じゃないのが返って魅力的に見えるのだ。

しばし見とれていると、女は再度こちらに視線を寄越し、ハンカチを持った手をひらひらと振って見せた。釣られて改めてハンカチに視線を戻すと、彼女の手が少しだが震えていることに気が付く。

当たり前だろう・・・都会の路地裏で生気の無い顔の男が崩れ落ちていたら誰だってあまり関わりたいとは思わないはずだ。

「・・・大丈夫です。放って置いて下さい。」

低い威圧的な声で敢えて冷たく突き放した。何歳も年下の女子供に同情なんかされたくないという気持ちも強かったが、単純に彼女は自分と関わるべきではないと言う想いから断ったのだ。

見るからに田舎育ち、上京したての世間知らずな子・・・。

どうしても俺が彼女に関わるだけで彼女を汚してしまいそうな気がしてならなかったから・・・。

しかし、彼女の腕はぴくりとも動かなく、彼女の顔を見上げると、真っ直ぐに俺の瞳を見つめてきた。瞳孔までもぶるぶると震えていたが、その奥から何か強い信念のようなものが俺の心を突き刺してくる様だ。

「…受け取ってください…。……………すごい汗…」

自分でも気づいていなかったが、確かに指摘されてみると自分の顔が滝の様な汗で覆われていたので、思わず袖で拭おうとしたら、「だめっ」とか細かいが鋭い声に止められた。

「…そうゆうのはだめです。ちゃんとハンカチで拭いてください…。スーツ洗うの、大変だし。奥さんとか…クリーニング代も…」

震える声でそう呟くと、女は俺の手に触られるようにハンカチを更に近づけてくる。

俺はあからさまに女を睨みつけてやると、吐き出すように

「いねえよ。洗濯もクリーニングも勝手にやらせとけばいいんだよ。」

そこまで言うてから、はっと我に返った。眉間に皺を寄せる女に軽く頭を下げ、「なんでもない、気にしないでくれ」と言うと、彼女はさも気にしていないかのように、またも少し心配そうな顔になり少し頷いた。

「あの…使ってくださいねばすぐに去りますので…なんかすみません。」

女は俺の目の前にしゃがみ込み、顔をまじまじと見つめてきた。

女はしばし俺と目を合わせたままでいると、少し唇の端を上げ、微笑んだかのように見えた。

すると手に持っていたピンクのハンカチを俺の頬に当てると、優しく顔中の汗を拭き取り始めたのだ。

慣れない行為に思わず鼓動が高鳴ってしまい身動きが取れずにいると、女は拭き終えたらしく、そっとハンカチを俺の手の中に収めた。

その時初めて彼女のしっとりとした柔らかい手が触れ、更に体が固まってしまふ。

「これ、よろしければどうぞ……。私はこれで。」

静かに彼女がまた微笑むと、すくりと立ち上がり、軽くお辞儀をしてから背中を向けて歩き出してしまった。

まっ……。

声にならない声で呼び止めようとしたが、彼女はどんどん離れていってしまふ。

何年も人に優しい言葉をかけられて来なかった俺は、どうしても彼女と離れたくなかった。

ふらつく足で立ち上がると目眩がしたが、構わず彼女を追ってゆっくりと歩き始めた……。

「いい加減にしてください！本当に警察呼びますよ！」

公衆電話の緑の口から吐き出されて来る嫌悪に満ちた声がボックスの中に響き渡る。

どうして？

警察を呼ぶようなことでもあったのかい？

俺が守ってあげるのに………

近頃吸い過ぎのタバコのせいか擦れた声で、なるべく優しく囁くとガチャンという音に遮られ通話は終わった。

何を照れてるいるのだろう。

毎日毎日君が家を出る時から帰る瞬間まで一緒じゃないか。

君が部屋に籠り、何かに怯えカーテンを閉め切っているときだって俺が君の窓の外に立っているのにも、気がついてるんだらう？

寂しくなんかないよ、恵………

「駿ちゃん、遅くまでお疲れなさい。あらいやだタバコ臭いわ、接待でもしてたの？」

今日は駿ちゃんの大好物のお好み焼き、プレート買ってきて焼いちやった。

駿ちゃんが帰ってくるまで私ずっと待ってたんだからあ。でも当たり前よね、駿ちゃんは一生懸命お仕事頑張っているんだものね。」

アパートの部屋のドアを開けた瞬間ババアの独り言のようなお迎えの言葉と、いつものきつい香水の匂いが俺を攻撃してきた。

ババアはいつだって俺がドアを開けるとそこに立っていた。

いつもこのタイミングの良さを不思議に思っていたが、ある時アパートに入るとき何気なく見上げると、窓から俺を見下げている顔がカーテンの隙間から見え、吐き気がした。

帰る時間なんていつもバラバラで、頻繁に深夜になったりもしていたのに、いつだってババアはドアを開くとフルメイクとピラピラな洋服を纏い立っているのだ。

気持ちが悪かった。

物心付く前から、きっと俺の記憶があるもつと前から、俺はこいつが大嫌いだった。

そして、今も。

「疲れてるんだ。風呂入るから先食つとけよ。」

目も合わせず仕事行き革靴を脱ぎ靴箱の中に納めながらそう言つと、ババアの横を素通りして自分の部屋へと向かった。

「あらいやよお、私、駿ちゃんと一緒にじゃないと食べたくないわ。

お風呂出るの待つてるから一緒に食べましよう？

焼きたてが良い？まだ材料余ってるからまだ作れるわよ？」

背中て奴の声を聞き流しながら自分の部屋の電気を点けると、いつもすぐに目の前に散乱したゴミや洋服があるのに、今日はキレイな部屋が浮かび上がった。

一瞬目を見張り一歩引いたが、自分の部屋に間違いはないようだった。

「くそババア！」

威圧的な、隣のマンションの棟にまで聞こえるほどでかい声で叫んだ。

一呼吸置いて、落ち着いた声が後ろから返ってきた。

「どうしたの、駿ちゃん。」

だめよあんまり大きな声出しちゃ、駿ちゃん疲れているんだから。

「

冷めた声は近所迷惑やらを「くそババア」を注意せずに俺の体調を
気遣っていた。そういうところが一番、気持ちが悪い。

「勝手に部屋に入んなって何回言えば分かるんだよ！

いつまでもガキ扱いしやがって！」

「あら、でも」

ひんやりと冷たく、カラカラに乾燥した細い指が首に後ろから絡み
付いてきた。背筋が凍る。思考回路が絡まり、いつきに涙が溢れて
来た。

「不衛生な部屋じゃ私の駿ちゃんが病気にしてしまうわ。

本に躓いて転んで怪我をしようかもしれないわ。

洋服に足を取られて頭を床にぶつけてしまうかもしれないわ。

私、駿ちゃんを心配してお掃除したの。

…分かってくれるよね？」

指先の鋭く紅く染められた爪が首元に食い込んでくる。

俺の膝はガクガクと震え、口からは反射的に

「ごめんなさい、ママ……。」

という言葉が出ていた。

耳元でふっとあいつが笑い、息が俺の髪を少し揺らした。

学生時代に良い思い出なんてほとんど無い。

登校拒否しがちになった中学時代。

原因はもちろんあのババア。

特別学校に友達が居たわけでもなかったのですと部屋に閉じこもってネットゲームに没頭していた。

いじめられるようになった高校時代。

逆に中学のときにいじめられなかったのが不思議だったほど。

いじめの原因は俺の容姿。妬まれていたのだと思う。

毎日毎日いじめによる悪臭を放ちボロボロな俺にクラスメートは誰も話し掛けて来なかった。

金を渡すためとパシリのためだけに登校していた3年間。

そんな3年間の内、1度だけ俺にも福が訪れた。

同じクラスの、俺と同じくらい静かで目立たない女子に高2のときに告白されたのだ。

お互い学校で唯一まともに会話をする相手同士で、俺も彼女のこと

が好きだった。

いじめてた奴らも若干飽き始めていた頃で、俺たちはささやかだが人生で一番幸せな時を過ごしていた…

『バシッ』

それは3度目のデートの待ち合わせ場所でのこと。

俺の後を付けてきていたババアが出てくるなり彼女にビンタを食らわせたのだ。

47

「私の駿ちゃんに近づこうとするなんて汚らわしい女！

二度とその面拜ますんじゃないわよ！」

呆然とする俺と彼女と通り過ぎの人達の前で昼ドラ並みの台詞を叫びもう一度手を振り上げた。

今まで一度も「ママ」に逆らったことのなかった俺だったが、この時初めてババアの懐に蹴りを入れた。

彼女とは別れた。

数週間の夢。

噂は広がりいじめは以前より悪化した。

全てはあいつのせい。

「いい加減にしてください！本当に警察呼びますよ！」

気持ちの悪い声で何か言っつきそうになったので急いで「切」ボタンを押した。

数日前からストーカーに悩まされている。

きっかけに覚えがなく、突然のことにストレスは最高潮に溜まっていた。

「もうなんなのっ……」

受話器を持ったまま床に崩れ落ちると、突然後ろからふんわりとした声が聞こえてきた。

「大丈夫だよ！。」

少なくとも、1月1日0時00分まで恵ちゃんは死なないから。これ、保障します。」

「……………」

天の使いクリス。もちろん瞬間移動なんかお手の物。テレパシーやら透明人間やら大抵の事は出来るとのこと。

「エンジェルみんなじゃなくて、俺が優秀だから」らしい。

ということクリスと出会ってから度々彼はこうして突然現れたりする。

そもそもストーカーに悩まされ始めたのは彼と出会ってから数日後。

そして今日でクリスと出会ってちょうど1週間、ストーカー被害4日目である。

どう考えてもクリスが関係していそうだが……。

「俺が恵ちゃんを危険に遭わせるわけないじゃん！」

顔の前で手を振りながら笑って否定するクリス。

「ただ他にストーカーなんかには遭う心当たりなど全く無い。」

「まあそういう奴ってさ、ちゃんとした理由なんかないんじゃない？
ん〜他人には理解出来ないようなものだったりするよ、うん。」

笑顔を絶やさずふわふわした喋り方で話すクリス。

私はこの妙にあっけらかんとした態度にイラつくどころか少し落ち
着いてきた。

「すごい他人事なのね。守ってくれるんじゃないの？」

エリート天使のクリス。

もちろん何の用も無く平々凡々な一人間の私なんかを訪れるわけも
無く。

「守るよ。ちよつと今まで忙しかっただけ。色々ね。」

「ただど今日からはちゃんと守るから、安心して。」

そう言いながら一瞬にして私の目の前に移動し頭を撫でてきた。

優しい笑顔、それ、弱いんです、私。

――――
1週間前の今日。

初対面のクリスにクリスマススイブにレイプされるだとか1月1日になると同時に自殺を図るだとかずいぶん言われたあの日。

「いい加減にしてくれる…?」

風に揺れるクリスの髪が視界に入った。

「確かに…なんか、すごいことは分かったわよ。予知能力っていうの?」

「だけど…そんな色々なこと信じるほど馬鹿じゃないの。」

もう終電は逃していた。タクシーを拾うしかないなあ。

緑色の瞳の少年に背を向け急ぎ足でその場から離れた。

追いかけてくる気配はない。

いつしか駆け足になっていた。

どうしても、あの場所から離れたかった。

心の片隅で彼の言葉を信じている…だけど、信じたくない…。

大通りに出ると、すぐにタクシーを捕まえた。

自動ドアが開き、乗り込む。

…と…運転手の席の後ろに、クリスが座っていた。

乗り込んだ瞬間はいなかった。

ドアが閉まった時もないかった。

だけど、今、彼は私の横に座っている。

運転手はあくびをしながら行き先を聞くのを待っている。

「まだ話は終わってないんだ。

俺、味方だよ？」

屈託のない笑顔で、運転手に彼が知るはずの無い私の住所を述べる
と、

クリスは何も言わずに窓の外の景色を見つめていた。

エンジェル…。

「ただ恵ちゃんに絶望してもらっただけに来たわけじゃないよ俺」

私の部屋に入るなりクリスマスは若干厳しい口調で言い放った。

「恵ちゃんを、死なせないために守りにきたの。

だって俺、天使だし。」

にこっと笑うと私のお気に入りの小さいソファに腰掛けた。

「それなりの力は持つてるし、全力で守らせていただくよ。」

何も言う気が起きなかった。

こいつが天使でも天使でなくても…もうなるようになれ…と投げやりな気分で居ると、

「本当に天使だってば。さっき証拠見せたでしょ?」

…テレパシーも使えるらしい。

そして今日は疲れてるだろうから、と言い残すと一瞬にして彼は姿

を消した。

一瞬あの懐かしいにおいが部屋中に漂い、次の瞬間には彼はいなくなっていた。

(瞬間移動・・・この目で見ちゃったよ・・・)

呑気にそう考えていると、携帯がけたたましく鳴り始めた。

「もしもし？俺、元樹春^{もときはる}。

こんな時間にごめんね！」

それはバイト仲間の春からの電話だった。

時計は既に深夜1時を指しており、普通なら嫌味の一つも言いたいところだが私の性格上無理だし、春ならばいつ電話が来ても気にならなかった。

「いいよ、どうしたの？」

「あのさ、もし良かったら明後日ちょっと遊びに行かない？」

急に予定空いちちゃってさ、前から2人で遊びたいねって話してた

から…」

わざわざ深夜に電話してまで聞くことかとは思ったが、快く承諾して待ち合わせ場所などを決めて切った。

元樹春は同じ時期にバイトを始めた仲なので、バイト仲間の中では一番仲が良い。

明奈や後藤を毛嫌いしているが後輩なので強く言えずにいつも愚痴を溢している。

しかし私がバイトで失敗をしたときはかばってくれたり、一緒に怒られてくれたりして、バイトを続けていられるのはほとんど彼のおかげだ。

「明後日かあ…」

「楽しみだな…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1546q/>

Check Mate

2011年1月15日20時48分発行